

の結果と比較して、他害行為者や就労者の割合、精神保健福祉法の再入院率は同程度であった。

以上からさいがた病院を退院した入院処遇対象者は退院後の社会資源の利用が促進されており、概ね良好な予後であることが示唆された。しかし、さいがた病院を退院した症例のほとんどが統合失調症か気分障害であり、物質使用障害患者と比べ良好な予後が予想される群であったこと、調査期間が比較的短いこと、なども良好な予後が示唆された理由の一つかもしれない。医療観察法による医療の効果検証のためには、今後も継続的な調査が必要である。

#### 4 Quetiapine が奏功した音楽幻聴の1例

北村 秀明

新潟大学医歯学総合病院精神科

音楽幻聴 (musical hallucinations, 以下 MH) は古くから知られる特異な症候群で、最初の記述は18世紀中頃から19世紀初頭にさかのぼる。聴覚障害を持つ中高年の女性に多く、その内容は繰り返すリズムやメロディーである。音楽としては子供の頃に良く聞いた童謡、唱歌、懐かしの歌謡曲が多く、欧米では賛美歌・聖歌も主題となる。MHはときに治療抵抗性であるが、非定型抗精神病薬である quetiapine が奏功した症例を経験したので、症例を報告し、MHの薬物療法を展望する。

症例は82歳の女性、加齢による難聴があった。X-1年12月頃から、頭の中で「うらら、うらら・・・」, 「今日は病院の日だ、日だ・・・」とメロディーや言葉が反復するようになった。他院で治療を受けるも改善せず、X年11月に当院を受診した。主訴は「頭の中で始終、音楽が鳴り響いて辛い」であった。山本リンダの曲が一日中聞こえるほか、人の声とも機械の音ともつかない言葉が、メロディーに乗って聞こえ、自分が意識したことが言葉になって繰り返されることもあった。家族は認知機能の衰えを気にしたが、HDS-Rは28点、日常生活は自立していた。

副作用に注意しながら、一日25から50mgの quetiapine の内服を漸増する初期診療計画を立てたが、初期のアドヒアランスは良くなかった。止むを得ず他の薬剤を試みたが、抑肝散、aripiprazole、olanzapineによるMHの改善は認めなかった。そこでX+1年5月から quetiapine を再開、7月下旬までに150mgに漸増した。するとMHが急速に改善し、8月には外出機会が増加、温泉旅行に行くことができた。頭の中で「えいやさ、えいやさ・・・」, 「あらら、あらら・・・」と同じ言葉の繰り返しがあったが、気にならなかった。X+2年の5月に quetiapine を一時自己中断するとMHが再燃したが、quetiapine を再開するとすぐに減少した。X+2年10月現在、MHは非常に少なく、日常生活への支障はない。当科を初診してから約2年、認知機能は緩徐に低下し、側頭葉を中心とした脳萎縮や血流低下もあるため、経過を注意深く観察している。

MHは聴覚皮質への聴覚入力への減弱が引き起こす解放現象と言われ、視覚障害を持つ人の Charles Bonnet 症候群との近縁性が指摘されている。MHに対する donepezil や SSRI の有効性と比較して、抗精神病薬については報告自体少なかったが、最近是比较的低用量の quetiapine 奏功例の報告が増えている。Quetiapine の代謝性副作用等に十分注意すれば、quetiapine はMHに対する新たな治療オプションとなる可能性がある。

#### 5 保育園年長児における ADHD 様行動と運動発達との関連について

稲月まどか

医療法人 白日会 黒川病院

【目的】新潟県下越地域では小児人口が減少する一方で、就学に際し援助や支援を有する子供の数は増えている。演者が各行政で行っている保育園巡回相談の現場でも年長児の行動は落ち着きがなく、衝動的で攻撃的な言動が多い。一方幼児健診の現場では、這い這いをせずにすぐ伝い歩きをする、早くから歩行器に入りあまり這い這いを